篠原聡子　研究室

専門領域：建築設計・建築計画

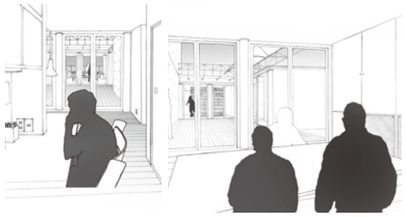
私たちの研究室では、建築、住居の設計について研究し、同様に実際の設計活動も行っています。
設計には色々な要素が関係しています。その中でも、私たちは住居学科の中にある研究室として居住者の視点を設計に反映させることを目的として、住宅や住宅地、都市の調査―フィールドワーク―を行います。歩く、見る、聞くことは建築の設計の上では基礎的、根本的な行為です。そこで収集した情報、感じたことが設計にとってはとても重要です。そしてもちろん、自分たちが設計した建物がどのようにして使われているか、今度は使用者として建築に参加することも大切にしたいと考えています。

Keyword 1 暮らし

建築家の自邸調査

暮らしからの建築家山本理顕氏自邸「ＧＡＺＥＢＯ」検証

建築家の自邸を暮らしの視点から検証し、今日までの「建築」だけへの関心に対して、「家」としての価値を問いかけてゆく『新建築住宅特集』の企画に調査協力し、山本理顕氏の自邸「ＧＡＺＥＢＯ」の調査研究を行いました。
家族の暮らしに密着している中庭に注目し、時系列に沿って利用のされ方を検証した上で、「ＧＡＺＥＢＯ」における中庭の存在意義を考察しました。
調査レポートは『新建築住宅特集』２００９年３、４月号に掲載されています。



家族の中心である空白「中庭」を徹底的に分析

調査とインタビュー

Keyword 2 コミュニティ

集合住宅における共用空間の調査

集合住宅のコミュニティ形成に関わる共用空間デザインの研究

本研究は、２００７年から継続して野村不動産と共同で行っているプロジェクトです。
どんな空間があればコミュニティができるのか、コミュニティ形成のために建築には何ができるのか、ということを、フィールドワークを通して研究してきました。
３年目となった現在は、設計ガイドブックの制作を目標として活動しています。

スケッチブック・図面・カメラを片手に、たくさんの集合住宅を調査しました。

住人の方々がどのような空間を、どのように使っているのか、ひとつひとつ分析します。

集合住宅のお祭りの様子も見に行きました。

Keyword 3 地域

月影の郷プロジェクト

地域の少子化・過疎化により閉校となった新潟県月影小学校の再生計画

本計画は関東４大学の研究室で２０００年から継続しているプロジェクトです。
廃校となった新潟の小学校を地域住民とのワークショップを通じ、宿泊体験施設へと２００５年にリノベーションしました。計画をハードからソフトへ転換した現在では、地域の民具展示計画などを中心にこの施設をいかに使い地域を活性できるかを主軸に活動しています。

ルーバー外装計画

月影の郷の第一印象である校舎全面のルーバーによるファサードは、半期に１度、その姿を変えます。これは、ルーバーの数を増減させることで、雪囲いや直射日光・視線の遮断など、季節によってファサードの機能を変化させるためです。
また２００６年度からは、夏季に植物のルーバーもセルフビルドするようになり、今年度は朝顔とゴーヤが一面を彩りました。

季節ごとに変化するファサード

民具展示計画

農具等の機械化により使用されなくなった民具は、地域性を強く残しています。その記憶を地域の核となる月影の郷に保存するために地域住民とのワークショップを通して計画を進めています。
小学校の原型を留めている３階に展示空間を制作し、２００９年夏に第１期の廊下部分が完成、プロジェクト開始から１０年の節目にあたる２０１０年夏に、第２期の教室部分も完成予定です。

ワークショップ

改修合宿

第１期民具展示室完成お披露目会

大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ２００９「やねキノコ」出展

越後妻有トリエンナーレとは、過疎化・少子化が進む新潟県と十日町市周辺の６つの市町村が、地域の再生と振興を図るために始めた、３年に１度開かれる国際現代アート展です。
豪雪地帯の越後妻有地域では、降雪に耐えるべく屋根の形に工夫が凝らされています。月影プロジェクトメンバーは、浦田地域の約 170 の家々をまわって屋根の形を取材し、白い雪をイメージした集落の縮図をつくりました。
会期終了後、やねきのこは地域の方々にプレゼントし、今も浦田に残っています。

調査

制作

配置

完成 !!

プレゼント